慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治社会主義意識の形成
Sub Title	Formation of the socialist mentality the Meiji Era
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.7 (1968. 7) ,p.26- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680715-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治社会主義意識の形成

中村勝範

一、序

わが国において社会主義者が本格的な実践活動を開始したのは、明治三十六年十一月の平民社創立以後である。平民社を中心とする社会主義運動や社会主義思想の研究はかなり精密に行なわれてきている。また幸徳秋水、木下尚江、片山潜といつたこの時期のトップ・リーダーの個人研究も活発であり、堺利彦、西川光二郎、安部磯雄といつた先駆者についての研究もないわけではない。そして以上のような研究は、今後ますます深められるであろう。しかし、いまあげたトップのリーダーを含めて、いわゆる平民社時代、すなわちわが国における最初の社会主義運動家たちは、いかなる動機によつて社会主義者になつたかという側面については未だ研究が及んでいないのではないかと思われる。もつとも、すでにあげた個人研究の論文・著書の中において、個人としての社会主義者への道は探求されている。しかし個人的な歩みだけでその時代の社会主義者たちのコースのすべてを語ることはできない。ここに個人もしくは数人の、社会主義者への道の研究からいま少し枠をひ

ろげて平民社に集つたグループが、いかなる動機で社会主義者になつたかを探つてみたいのである。

平民社の発行していた機関紙には十四回にわたつて「予は如何にして社会主義者となりし乎」[1]という記事がのつている。これには安部磯雄、幸徳秋水、堺利彦、木下尚江から山口義三、中里介山、小田頼造、内山愚童、さらにはこの欄にしか名前を出さなかつたような全く無名の社会主義者まで入れれば八十二名が執筆している。小さい欄であるから文章は多少削除されているものもあるが、まず全部が自筆であるとみて間違いでないと思われる。それにトップ・クラスから名もない者にいたるまでの多様な社会主義者が登場してくることも、この方面の研究には好都合である。もし問題になる点があるとすると、八十二名という人数であろう。これをあまりにも少ないと考える者もあるかもしれないが、この点も、明治三十九年に誕生した日本社会党の登録党員が二百名[2]に満たなかつたということを考えたならば八十二名は必ずしも少ないとはいえない。なにが彼等を社会主義者にさせたかを知るにこれにまさる資料はないと思われる。これを第一資料とし、さらにその外の資料を補助的に使用して、明治初期社会主義者の、社会主義者になつた理由を分析して行くことにする。

(1) 平民社の機関紙週刊『平民新聞』には第三号から四、六、七、八、九、十、十二、十三、十五、十九、十二、十三号に「予は如何にして社会主義者となりし乎」と題して七十八名が執筆した。七十八名は全部男性であると思われる。『平民新聞』の後継紙週刊新聞『直言』第二巻第十二号（婦人号）には四人の女性が「如何にして社会主義者となりし乎」という題で執筆している。この両方をあわせて八十二名が本研究の対象人数である。

(2) 日本社会党に正式に入党届を出した者は、入党後脱党除名されたものを含めて二百名に達しなかつたことは拙稿「日本社会党の組織と運動」（拙著『明治社会主義研究』〈世界書院　昭和四十一年十二月〉の第七章に所収）において明らかにしておいた。

二、社会主義者になつた動機の分類

「予は如何にして社会主義者となりし乎」及び「如何にして社会主義者となりし乎」（今後この両方をあわせて「社会主義者となりし乎」という一つの名称に統一する）は、社会主義者たちが、何が自分をして社会主義者にさせる動機となつたかをかなり

卒直に示したものである。そしてこの内容は、今日頻繁におこなわれる社会調査の場合でいうとライフ・ヒストリーに近いものである。したがつて、そこには社会主義者になつたとされる理由が一つだけ書かれているのは稀であつて二つ以上書かれているのが大部分である。中には三つも四つも、あるいはそれ以上の原因が書かれている場合もある。それもそれぞれの原因が必ずしも明瞭に区分けできないようなものもある。

例えば「先年現兵役に徴集せられ、別社会のこととて万事異様の感慨に打たれたる折柄、或筋多き者が新兵に向つて最も残酷なる一語を吐けり、曰く『汝等如きものは死んでも構わない、伝票を切れば何程も替りが来る』此一語は予の脳髄に深刻せられて深く軍隊の害悪を感ぜしめたり、其後従二位子爵交野時萬なる者の企てたる大和歌集の為に事務員となり、華族なる階級が社会に害毒を流す事を悟れり、斯くの如き境遇を経来る間に『新社会』『社会主義神髄』等を読みて一道の光明を認め、猶田中正造翁の行動に感激する所あり、終に社会主義の一卒たらんと決心したり」[1]という半田一郎の文は、社会主義者となつた原因を探るのにわかりやすいものである。これはその原因として、その第一は反軍感情、第二は反華族感情、第三には読書、さらに第四には田中正造の行動（本稿では「鉱毒問題」の項目に含む）の四原因をあげていることになる。

「余は現時或商家に雇れて其の日を送れるものなるがコレまで種々なる業務に服せしも何時も尻の据らずして長きも二年短きは数月にして辞するが例なりし……斯く転々する間に余は幾度人の門に伺候してお頼み申すお願申すの言を吐きしよ幾度平身低頭せしよ……如何に不平煩悶せしよ余の当時の経験は余をして貧者に同情を寄するに至らしめ以来日常見る所の新聞紙も成る可く平民的のものを取り……貧者に対する同情を愈々高め遂に『帝国主義』『社会主義神髄』等を読みて社会主義者たらんと決心するに至りたり」[2]という「一読者」の文では、何が社会主義者たらしめた原因とされているだろうか。貧者への同情と読書の二つは、間違いなく社会主義者たらしめた原因である。しかしいま一つ「不平」は原因として挙げられないだろうか。この不平という点を考えるとそれのよつてきたる原因は職業を転々として人の門に立つ毎に平身低頭しな

くてはならないところにあることがわかる。ところで「不平」と「職業の転々」とを連想して、ともすれば「貧乏」が彼をして社会主義者たらしめたいま一つの原因ではないかと考えたいところである。真実はそうかもしれないがこの文からだと彼が貧乏であつたかどうかは不明である。人に雇われるのは貧者だけではなく富裕なる子弟にも絶無とはいえないからである。このようにして文章からはつきりわかるところは、不平、貧者への同情と読書の三つが社会主義者たらしめた原因として挙げることができる。後に挙げる分類はこのようにして作成したものである。

八十二名の社会主義者は、社会主義者になつた原因として総計一五二の事由を挙げている。一人でほぼ二事由というわけである。総計一五二の事由を分類し整理したのが第一表である。原因として挙げられた頻度の多い順に上から下へ並べ、その頻度数を記した。

すでに見てきたように、社会主義者にさせた原因は複雑であつて、ただ一つの原因だけというものは少ない。しかし本当の複雑さというのは、数個の原因がからみあつているというところにあるのではなくて別にあると思われる。例えば、

「余は七八年前思想の煩悶を起したことがある、其時新聞雑誌を彼れや是れやと或る制裁の裡に濫読して居る中フト社会問題と云うものに接着した、当時は未だ社会学と社会主義との区別を知らなかつたが趣味を感じて注意の度を加うるに随い遂に社会主義は一方には個人の思想に満足を与うるに於て宗教道徳以上の力があり一方には小作問題、都市問題、其他政治上の諸問題に大なる必要があると信ずるに至たが、今日の

第一表　社会主義者にさせた原因

	原　　因	頻　度
1	読書（含雑誌・新聞）	49
2	社会主義の講演・演説・講義	21
3	貧者弱者への同情	17
4	社会の不合理への反抗	15
5	貧　　乏	10
6	キリスト教	8
7	反戦・反軍	6
8	鉱毒問題	5
9	家の没落	4
10	自由民権	3
11	仏　　教	2
12	儒　　教	2
13	そ　の　他	10
	合　　計	152

余は非常なる苦痛の下に他日の伸張を期して大に忍びつゝある者であることを自白して置きます」[3]と鷲尾生はいう。この場合、彼が社会主義者になつた原因といえばただ一つ「読書」（新聞・雑誌）ということになるであろう。しかし読書で「フト社会問題と云うものに接着」したというが、彼の心中にそれを摸索し、それに関心を持つていたということがなかつただろうか。そういう経験乃至態度もしくは関心がなくして、偶然に逢着したものに突如として深い関心、係わり合いを持つことがあるだろうか。人は反応に先立つて、反応しうるだけの準備がなくてはならないはずである。そうであるとすると、鷲尾は実は読書による感化の前になんらかの経験・意識・関心の蓄積があつたはずである。鷲尾はそれを「思想の煩悶」といつているが、これは抽象的であつて、それは如何なる思想であり、現実の如何なるものとかかわりをもつ思想であるかは不明である。鷲尾は読書だけを社会主義者になつた原因としているが、人間の態度・意志決定にはいまみてきたように、本人の証言以外のものも重要な関連性をもつているはずである。時には証言された動機・原因より、動機・原因に先立つて蓄積された経験・意識・関心の方が重要な場合もありうる。このように、人間の態度・意志決定の要素の複雑性を十分に承知しながら、限られた短文の中で、自分を社会主義者にさせたのはこれであると意識して証言しているものだけを拾いあげて分類整理すると、第一表のようになる。

社会主義といえば誰でも連想するのは「貧困」ということであろう。ところが第一表によると自分が貧乏であることが原因で、それが自分を社会主義者にさせたというのは全頻度の一割以下である。このことは、彼等以外の者は貧乏ではなかつたということを意味しないが、自分の貧困が社会主義者たらしめた原因だと意識している者がきわめて少いことを示している。家の没落とは例えば「余の僅々十年間に自作農の位置より小作人に貧落するに至りたる事情」[4]というものであるから、これを「貧困」に含めても、なお全体の頻度の一割に達しない。

自分が貧しいと意識することよりも、「貧者弱者への同情」の方が社会主義者にさせた原因としては多いということに注

目すべきであろう。もちろん、ここでも、自分も貧乏であつたかもしれないが、自分の貧しさよりも他人の貧しさの方が強く作用して社会主義者にさせる原因になつているのである。社会主義は、貧困を生む社会を改革する思想であり、理論であるが、それが実践運動として開始された頃の社会主義者は必ずしも貧者ではない。安部磯雄、幸徳秋水、堺利彦、西川光二郎、木下尚江、片山潜といつた人々を考えてみても、かつては彼等の中には貧しい者もいたにせよ、彼等が運動を起した頃は大学教授であり、一流新聞記者であり、悪くとも一日の生計に窮するという状態の者はいなかつた。ある生計に困らない社会主義者の次の証言は注目すべきであろう。

「私は比較的に金のある円満な家庭に生れたものであるが貧者に対する同情と諸種の社会主義書も読んだことから社会主義を信ずるに至つた……或時父に社会主義の話を為し、其の時父に『お前は社会党になつたのか、ソンナものになると警察へ呼び出されるぞ』と云われ、一時ビクとして実は後悔しました、ケレども一旦信じたことであるから又々社会主義が慕わしくなり、今では注意をしながら私の出来る範囲で斯主義の為に尽そうと云う考えで居ります」(5)

富裕な階級に所属する者でも、警察の監視や家人の反対に屈しないで貧者に同情し、社会主義を信奉する者がこのように存在したことを注意したい。富裕な階級に属する者の社会主義への理解といえば、そもそもこれなくしては平民社の創立はなかつたかもしれない。平民社を創立するにあたつて幸徳と堺によつて準備された資金は千七百八十二円九十二銭であつたが、そのうち実に千七百五十円が小島龍太郎と加藤時次郎によつて出資されたのであつた。(6) 平民社は創立後四ヵ月にして給料を一銭も支払わぬ共産社会をやむなく採用しなくてはならぬほど経済的に急迫していた。さらに平民社はその年（明治三十七年）の末には二つの裁判事件に対する罰金及び損害賠償として支払わねばならぬ金がなかつた。(7) もしそれを支払うことができないと平民社は解散しなくてはならなかつたかもしれない。このとき七百円の寄附をした岩崎革也がいなかつたならば、平民社まる二年の生命は少くとも十ヵ月はさらに縮められていたに違いない。このように見てくると運動の担い手としても、また運動の協力者としても、富裕者が社会主義の発展に大きな貢献をしていることに気づくのである。社会主義運動

は誰よりも経済的・社会的に圧迫されている階級のものであり、そうであることによつて運動に生命が吹き込まれるが、その運動の初期には富裕な知識階級の貢献も無視できない。このことはわが国だけに言えることではなく、ロシア革命運動の歴史を見ても、或いはまたイギリス社会主義運動の歴史を見ても、その初期において富裕な知識階級の残した大きな足跡を認めないわけにはいかない。

次に「反戦・反軍」感情から社会主義者になつたという頻度は六という数字しかないことを意外に思う者もいるかもしれない。平民社はなによりも日露の風雲急をつげる時、平和主義を唱道し、戦争を禁絶せんがために創立された。もちろんそれだけが唯一の目的ではなかつたが、社会主義と平和主義（非戦主義）は平民社の精神的な二大支柱であつた。このように社会主義者は戦争に反対をしたが、反戦・反軍感情から社会主義者になつたと言う者は僅少であつた。したがつて平民社の影響下にあつた人々は、たしかに戦争反対の運動をなによりも熱心に展開したが、彼等は直接にはほとんど戦争による被害は受けていないし、また戦争の悲惨さについて間接的にでも知覚してそれによつて社会主義者になつたのでもない。もつとも、本稿でとりあげている「社会主義者となりし乎」に登場する人々は比較的平民社初期の人々である。したがつて彼等が社会主義者になつたのは、戦争以前か、或いは戦争の前半においてであつたという条件は考慮する必要があるかもしれない。しかしそのような考慮をしても、平民社を支えた社会主義者たちは、戦争と軍隊への憎悪から社会主義者となつたという者は多くなかつたという事実はかわらない。

本節ではまず社会主義者になつた原因を分類し、貧乏は社会主義者にさせるかなり有力な要素であつたが、それ以上に貧者・弱者への同情が社会主義者にさせた、ということを述べた。ついで、反戦・反軍感情は社会主義者にさせる原因としては決定的とはいえなかつたことを知つたのである。

（1）週刊平民新聞　第八号　明治三十七年一月三日

(2) 週刊平民新聞　第十号　明治三十七年一月十七日　点線も原文のままであるが、これは恐らく編集部により削除された箇所をさすものであろう。
(3) 週刊平民新聞　第十五号　明治三十七年二月二十一日
(4) 週刊平民新聞　第九号　明治三十七年一月十日　伊東嘲風の文。
(5) 週刊平民新聞　第四十五号　明治三十七年九月十八日　米田涙月の文。
(6) 「発行事情」(週刊平民新聞　第一号　明治三十六年十一月十五日)、「平民社籠城の記」(週刊平民新聞　第十七号　明治三十七年三月六日)及び「日本社会主義運動史話」(『堺利彦全集』第六巻　中央公論社　昭和八年十月　二一六頁)によりこの金額を知りうる。なお拙稿「平民社とその財政事情」(前掲拙著『明治社会主義研究』の第五章に所収)においても明らかにしておいた。
(7) 右掲「平民社とその財政事情」

三、キリスト教と自由民権思想

明治三十四年五月、社会民主党が結党されようとしたとき、創立者六人中五人までがキリスト教徒であり、残りの一人が自由民権運動の流れを汲むものであつた。こうした事実から、わが国における社会主義はキリスト教と自由民権運動とが合流して形成されたと説く者もいる。[1] 社会民主党より前に、明治三十一年十月に社会主義研究会が生まれたが、これはキリスト教徒が中心であつた。[2] 以上のように、わが国において社会主義思想の啓蒙期には間違いなくキリスト教の影響が圧倒的であり、自由民権運動の影響もかなりあつた。社会主義運動の実践に入つた頃、キリスト教と自由民権思想はどの程度、社会主義へのスプリングボードになりえたであろうか。この点を見るとキリスト教の影響はこの時点でもなお無視しえない力を持つていたことがわかる。安部磯雄、木下尚江はキリスト教から社会主義へ入つていつた典型であり、殊に木下は自分の社会主義を「基督教的共産主義」または「共産主義的基督教」[3]といつたほどである。キリスト教と社会主義の関係を簡明に表現している無名党員の証言を二つほど引用してみよう。

「私は基督教徒ですが或時社会主義の演説を聞きまして斯主義は則ち基督の平等博愛を実行せんとするものなるを知り遂に社会主義の信者となりました」(4)

「余は木下尚江氏と同じ意味に於ての社会主義者である、曰く霊的方面の発展は宗教（基督教）を措て他に道なく、肉的方面（即ち生活状態）の改善は社会主義の実践に待つ外はないと云うのが余の考えである、要するに基督教は夫にして社会主義は婦なれば二者合体して爰に始めて理想に到達することが出来るものと思う」(5)

いま挙げた二つの例からわかるようにキリスト教と社会主義の結びつきに二つの結合の仕方があったことがわかる。その一つはキリスト教と社会主義とが対等であり、同一であるという考え方である。いま挙げた例の中の前者がそれである。この考え方は村井知至の『社会主義』の中に書かれている「初代のキリスト教にいたっては大いに社会主義と相似たるものありしなり、いなただに相似たるのみにはあらずして、まったくその精神思想を等しくほとんど同名異体の観ありき」(6)としていたものと同一であったといってよい。なお参考までに挙げると初代キリスト教と社会主義は精神思想を等しくするとして村井が挙げている共通点は左の七項目であった。

第一、理想と目的とが同一である。

第二、ともに伝道に熱心である。

第三、ひとしく社会の迫害にあっている。

第四、ともに伝播が速い。

第五、その思想においてともに世界的である。

第六、ひとしく貧民に対して同情を注ぐ。

第七、ともに人類同胞主義である。

右七項目の共通点の中、第二、第三、第四は挙げる必要があったかどうか疑われるが、第五、第六、第七は納得できよう。

もつとも第七については疑問を持つ者もあるだろうが、やはり一番問題なのは第一であろう。このようにわれわれには疑問を抱く点もあるが、村井はとにかく初期キリスト教と社会主義は同じだとした。そして明治初期社会主義者の中には村井と同じ考えからキリスト教より社会主義にごく自然に移行していつた者もいる。

キリスト教と社会主義のいま一つの結合の仕方は、さきに引用した文の後者のように精神的救済と経済的救済をわけて、精神的救済はキリスト教により、経済的救済は社会主義によるという考え方である。したがつてこの両方面の救済されなくてはならぬものは別のものであり、救済するものも別のものである。安部磯雄は、人間には精神生活が目的であつて、物質生活はその手段にすぎないといい、[7] 社会主義はあくまで精神生活の手段であると考えたがこの考え方は先に引用した後者と同じである。この考え方を図式に示すと左の通りになろう。[8]

(一) 精神的問題（＝目的）を解決するもの――キリスト教

(二) 物質的問題（＝手段）を解決するもの

社会主義＝根本的解決
社会事業＝応急的解決

この(一)と(二)は別個のものであるが、両者は人道主義という紐帯によつて結合されているという考え方である。

その結合の仕方は二通りあつても、なおキリスト教と社会主義の関係は濃厚であつたが、自由民権と社会主義との結びつきを挙げた者は僅少である。堺利彦、竹内余所次郎、中里介山の三人に過ぎない。われわれは片山潜、幸徳秋水、木下尚江も自由民権思想からも大きな影響を受けたことを知つているが、[9]「社会主義者となりし乎」にはそのことが明瞭な文字で書かれていない。しかしそのことは自由民権と明治初期社会主義とのかかわりあいが浅いということではあるまい。二十年前に旺盛をきわめた思想と運動は、明治十年代では斬新なものであり、刺激的なものであつても、明治三十年代ではその思想

の価値が薄れるのではなくて既得のものになるのである。もちろん自由民権運動は未完のものであつたであろう。未完なものではあつても、人々の思想と精神にはなんらかの跡を残し、残す以上、既得のもの、体得されたものとなつていくだろう。だから知らず識らずのうちに自由民権思想の上に社会主義思想が接木されていても、人は台木となつた自由民権思想を自覚できないわけである。自由民権に比較してキリスト教が社会的に問題化されたのは十年後であり、それだけ社会主義の実践期に近いことが、キリスト教と社会主義の結びつきを意識させることが強いのである。鉱毒問題は自由民権、キリスト教問題より社会的な事件としては波紋は小さかつたといつてよいと思うが、社会主義啓蒙期から実践期にかけて、社会主義の登場と重なり合つているがために、そこから社会主義者になつたとする者が五という頻度を示す。それはキリスト教（頻度八）より少ないが、自由民権（頻度三）よりは多い。

キリスト教と社会主義との結びつきをみたついでに、仏教と社会主義との結びつきについてもみて置きたい。内山愚童は、「余は仏教の伝導者にして曰く一切衆生悉有仏曰く此法平等無高下曰く一切衆生的是吾子これ余が信仰の立脚地とする金言なるが余は社会主義の言う所の右の金言と全然一致するを発見して遂に社会主義の信者となりしものなり」[10]という。これは仏教と社会主義は同じだとする考え方であり、いま一人仏教から社会主義信奉者となつた幸内久太郎も内山の考えに近い。ただ幸内は「余は信ず若し当世に在らば釈迦も孔子も亦基督も社会主義の伝導者たるべき事を」[11]といつているところが内山と違う。仏教信仰が社会主義者になつた原因とする者が二人であつたが、仏教に愛想をつかしたことが、社会主義に触れて激しくこれに誘い込まれることになつたという者も二人いる。**第一表**の仏教が原因で社会主義者になつたという枠にはこの仏教失望者は入れてない。いまその一例をあげると次のようである。

「私は初め仏教の信者でありましたが、僧侶が貧乏人の虐待され居る人々等に向つて『何事も前世の因縁だから』と説き、又乱暴なことをして富を得た人々を弁護して『コレと云うも善因あつてのことじや』と説くを聞いて仏教がイヤになり、後孟子墨子を読んで王者庶人

の区別なき理を知ると共に衣食住の不平等も非理たることを知りましたが、而し当時は之が社会主義であることを知らなんだ、之が社会主義であることを知つたのは片山潜氏が当地へ遊説せられた其演説を聞いてからのことであつた」[12]

キリスト教徒であつたものが、自己の信仰に愛想をつかした者で社会主義者になつたという者がなかつたことと比較して、仏教信者のこの現象はキリスト教者と異るところである。仏教の「一切平等」の教理が薄れて卑俗な教義に堕し去つていた一面を示すものかもしれない。といつても、仏教教義の持つ革新性が全く失われたというのではない。仏教教義を身をもつて追究するのあまり、大逆事件の犠牲者となつた者が僧侶と寺院出身者から四名も出たことを無視するものではない。[13]

(1) 堺利彦「黎明期総説」(『社会科学――日本社会主義運動史――』所収〈改造社　昭和三年〉九頁)
(2) 石川旭山編幸徳秋水補「日本社会主義史」(新版『明治文化全集』第六巻所収　三六二頁)
(3) 前掲週刊平民新聞　第九号
(4) 前掲週刊平民新聞　第十号　稲生誠吉の文。
(5) 週刊平民新聞　第十五号　明治三十七年二月二十一日　天随生の文。
(6) 『社会主義』(明治三十二年七月　労働新聞社)一二九頁
(7) 安部磯雄『社会主義者となるまで』(改造社　昭和七年二月)二〇四頁
(8) 住谷悦治他編『明治社会思想の形成』(芳賀書店　昭和四十一年十二月)二三九頁
(9) 中村菊男・中村勝範著『日本社会主義政党史』(経済往来社　昭和四十一年九月)四―八頁。ただし片山潜は「社会主義者となりし乎」に書いていない。
(10) 前掲週刊平民新聞　第十号
(11) 週刊平民新聞　第十三号　明治三十七年二月七日
(12) 右同　小森治助の文。
(13) 内山愚童、峰尾節堂、高木顕明の三人は僧侶であり、佐々木道元は寺院出身者である。彼等の信仰と社会主義・大逆事件との関係について、ユニークな研究をされたのは吉田久一氏であつた。氏の『日本近代仏教研究』(吉川弘文堂　昭和三十四年三月)の第六章「幸徳事件と仏教」は感銘を与える研究である。

四、読書と演説

第一表で明らかなように、社会主義者となつた原因として挙げられたものの中、もつとも頻度の高いものは「読書」（雑誌・新聞も含む）であり、これは圧倒的である。言うまでもなく読書の感化といつても、それは他の原因とからみあつて読書も原因の一つとされているのであつて、ただ読書だけを挙げているのは二例にすぎない。それにしても圧倒的な影響力を持つていた読書では、いかなる書（もしくは雑誌または新聞）が読まれていたであろうか。それを示すのが**第二表**である。

第二表　影響をあたえた書物・雑誌・新聞

書名	著者	頻度
社会主義神髄	幸徳秋水	19
萬朝報	新聞	10
新社会	矢野文雄	7
社会問題解釈法	安部磯雄	7
家庭雑誌	堺利彦主宰の雑誌	6
週刊平民新聞	平民社機関紙	5
労働世界	片山潜主宰の雑誌	4
社会主義論	安部磯雄	3
二十世紀之怪物帝国主義	幸徳秋水	3
社会主義	労働世界の後継誌	3
社会主義	村井知至	2
家庭の新風味	堺利彦主宰の雑誌	2
社会主義概評	島田三郎	2
進歩と貧困	ヘンリー・ジョージ	2
百年後の新社会	ベラミー	2
その他		19
合計		96

この時期における社会主義理論研究の最高水準をしめすものといわれる幸徳秋水の『社会主義神髄』[1]は群を抜いている。この書は「社会主義とは何ぞ」ということを、社会主義者の一人として世間に知らせるために、社会主義の大綱を「鳥眼観（バーズアイビュー）」したものであると幸徳自身が「自序」で述べている。それは名文と整つた構成とによつて広範な読者をもち、啓蒙書としても多大の宣伝的役割を果したことは発行の年にすでに六版まで重ねたことでも明らかだが、[2]われわれの研究によつても『社会主義神髄』はこの時期における社会主義啓蒙の強力な武器であつたこと

がわかる。『社会主義神髄』と共に、やはり幸徳の『二十世紀之怪物帝国主義』を考えあわせると、この時期における幸徳の影響力は誰にもまして巨大であつたことがわかる。社会主義協会も社会民主党も安部磯雄、片山潜が中心であつたが、平民社に至つて「幸徳が中心に立つ時が来た」[3]のである。

平民社の中心人物を一人挙げるとするとそれは幸徳だが、彼は堺利彦というよき協力者、提携者を得てはじめて幸徳の本領を発揮することができた。「堺君という人と提携したことが、実に幸徳の幸福であつた」[4]といわれる。第二表でも、堺の主宰する二つの雑誌はかなり読まれて社会主義者を創り出すのに役立つている。幸徳には鬼気を宿した悲壮感がただよつていたが、その対照的に堺には常識とユーモアと事務的才能とが備わつていた。幸徳が『社会主義神髄』と『二十世紀之怪物帝国主義』という固い書物ですくえなかつた部分は、堺の『家庭の新風味』及び『家庭雑誌』ですくいあげることができた。『家庭の新風味』は家族制度を批判したがそれは「小ブルジョア改良主義」の立場にあり、『家庭雑誌』は家庭の中より漸々に社会主義の理想を発達せしめようとするものであつた。[5]「最初私の家では家庭の新風味や家庭雑誌を愛読して堺様の家庭論には非常に尊敬を払つて居りました、処が堺様が萬朝報社を出られたので、跡を追うて平民新聞の購読者と成つたのです、そして其時まで社会主義とは何で有るかも知らなかつたが漸く分かつて来る」[6]といつたのは延岡為子であつた。堺は『家庭雑誌』で、社会主義の啓蒙をひそかに目的にして編集しているのだが、読者には必ずしもその意図がわからない。しかしそれに曳かれていくといつとは知れず社会主義者になつているというような巧みな、柔軟な戦術をとれたのが堺であつた。

安部磯雄の『社会問題解釈法』も『社会主義論』も理論の緻密さと構成の揺ぎなさでは決して他にひけをとらないし、理論家としては第一人者であつた。[7]しかしそれだけに安部の書を消化できる者は幸徳の書の読者に比較してやや層が薄かつたことも避けられなかつた。

矢野文雄（龍渓）の『新社会』はユートピア論を日本的に適用したものであつたが、明治三十五年七月に刊行されて、同月中に六版まで出し、八月中に十二版まで伸び、十月中に十五版、十一月に十七版までいつたという。[8] この書を読んで社会主義者になつたとする者が多いのもうなづけるのである。

最後に、萬朝報に影響が第二位であることを注目すべきだろう。萬朝報以外にも、もちろん多くの新聞があつたが、この新聞以外は全く登場しないのはなぜであろうか。萬朝報と共に発行部数の最も多きを誇つていた二六新聞は熱心に労働問題を説き、労働者のために気を吐いていたが、それを読むことによつて社会主義者になつたという者もいない。萬朝報の特徴についてもつとも明快にこの間の事情を説いてくれるのは山路愛山である。「夫れ当時の二六新聞は小野瀬氏以来の関係に依りて頗る労働問題に注意し、労働者の為めに気を吐く万丈なるものあり。萬朝報の社中に於ては幸徳秋水、河上清、堺利彦、斯波貞吉の諸氏自ら一種の梁山泊を作りて所謂其社会民主的の議論を鼓吹す。人を射んとせは先づ馬を射よ。賊を虜にせんとせば先づ王を虜にせよ。一方に於ては労働者は二六新聞を味方とし、他方に於ては社会主義者は萬朝報を藪窟とす」[9] と山路は書き残している。萬朝報は商業新聞の衣をつけて、精神において社会主義を鼓吹していたのである。そこにこの新聞の読者が社会主義者になつた理由があつた。

ところで書物なり新聞、雑誌なりで社会主義の思想理論を読んで社会主義者になつたという者でも、そうした反応に先立つた体験や摸索がほとんどの場合存在した。そのことはすでに別の事例を示すために挙げた証言の中でも出てきておつたが、ここでも南助松の例を一つだけ挙げよう。彼の証言によれば、まず彼は炭坑夫としてその苦しい境遇を実地経験したのだつた。この苦しみからの解放を目ざして労働運動者になり、そのために好きな酒もやめ一身一家を悉く犠牲にした。「此難儀の労働運動に足を踏み込んで貧苦と戦い、資本家側よりは蛇蝎視せられ、仲間の労働者よりも憎まれ、恨まれ」[10] て挫けそうになつたとき、彼を立上らせたのは西川光二郎著『英国労働界の偉人ジョン・バーンス伝』であるという。南はこれを

再三翻読し、その度毎に彼を師表と仰ぎ模範としたという。以上が南が社会主義者となつたプロセスだという。これからもわかることは、読書はそれに先立つて体験し、そこから生まれてきた考えを煮詰めさせ、最後の固め役をするものであるように思われる。漠然とした考えを明瞭なる確信に結晶させ、挫けそうな意志を再起させるのが読書であるようだ。

読書についで社会主義者にさせたものとして、「社会主義の話、講演、演説、講義」がある。その内容はまず社会主義者の友人と話を重ねる毎に、社会主義的な考え方になり、ついに社会主義者となつたというものである。このように社会主義者との交友関係からというものは多くはないが、第一の型としてある。つぎに第二の型として学校において教師が社会主義の講義を熱心にしたことから影響されたというものである。これも二、三の例だが存在する。第三の型は社会主義の演説・講演会に接して教化されたというものであり、この型がもつとも多い。東京では社会主義協会や平民社が頻繁に演説・講演会を開催していたから、東京在住者が第三の型の中で多くを占めるが、地方においても東京からきた社会主義者の演説会で影響されたという者が幾人かいる。いずれにしても、社会主義の話をきいて社会主義者になつたとする者は、さきの読書から社会主義者になつたとする者と似ていて、話をきく前になんらかの反応に先立つ体験、摸索があつた場合が多い。だからこの場合も、読書の場合と同様に、混沌とした社会的関心を整理する役をはたしているようである。その例を一つだけ挙げよう。

「僕の社会主義になつた径路は僕自身に於てもそれは解らぬ、尤も僕は暫く小笠原誉至夫君の主宰せらるゝ『和歌山実業新聞』の編輯に従事して居た事や、僕の友人には彼の鉱毒問題で奔走した連中があり、又は在京中に秋水君や枯川君や木下君等の社会主義演説を聴いたことや、又は片山君や西川君にも面会したこともあり、近来は始終児玉花外君等と往来して居ること、それやこれやが綜合して何時の間にやら社会主義者に感化されて了つたのであろう。そんな風であるから社会主義の系統がないけれども今では敢て人後に落ちぬ位の信念を有つて居る積りだ」[11]

この場合、新聞社に勤務していて漠然とした社会の矛盾を感じていたのであろうが、自分では鉱毒問題に直接タッチしな

かつたけれども、その方面の運動家の話をきいてまた矛盾感を深めたといえよう。そういう経験のあとで社会主義者と交友し、社会主義者の演説をきくと彼等の話が消化できたのである。社会主義者たちの話が消化できるということは、自分も社会主義者と同じ方法で考えるようになるということである。つまり彼自身が社会主義者となり、その上に立つて物を考えられるようになつたということである。社会主義の話をきいたことによつて、漠然とした社会的関心が社会主義という一本の線に整理されたのである。

以上が、社会主義者にさせた原因の第一位の読書と、第二位の社会主義の話の内容の分析である。当時最大の影響力を持つていたのは社会主義的な書物、新聞、雑誌であり、それについで効果のあつたものは社会主義の演説・講義・話であつた。[12]

（1）渡辺・塩田編『日本社会主義文献解説』（大月書店　一九五八年二月）四五頁
（2）右同
（3）木下尚江『神人間自由』（中央公論社　昭和九年九月）二二頁
（4）右同　二三頁
（5）前掲『日本社会主義文献解説』六四頁
（6）週刊新聞直言　第二巻第十二号　明治三十八年四月二十三日
（7）前掲『明治社会思想の形成』二三九頁
（8）大原社会問題研究所編『日本社会主義文献　第一巻』（同人社書店　昭和四年九月）三一頁
（9）山路愛山「現時の社会問題及び社会主義者」（新版『明治文化全集』第六巻　三八三頁）
（10）週刊平民新聞　第七号　明治三十六年十二月二十七日
（11）週刊平民新聞　第十三号　明治三十七年二月七日　吉田笠雨の文。
（12）社会主義に関する読書と、その話をきいたことによつて、社会主義への確信を固めさせることに役立つているという点の立入つた考察は『三色旗』昭和四十三年七月号の拙稿「明治社会主義形成の要因」を参照されたい。

五、結　語

平民社が創立される二、三年前は「社会主義流行の時代」であつた。社会主義の宣伝や研究は比較的自由であり、また社会主義は大衆の間で人気のあつた時代である。[1] こういう時代のピークは過ぎていたが、あまり行き過ぎない時に平民社が創立されたことが、新聞、雑誌、書物、演説等により社会主義者になる者を多くしたのかもしれない。それにしても社会主義といえば、「貧困」「反戦」と結びつけて考えがちな現代人でも、明治初期社会主義者は、彼等が社会主義者になつた原因として貧困と反戦とをそれ程挙げていない事実を認めなくてはならない。それらよりも、書物、新聞、雑誌や演説等々の中の人道主義的な主張が多くの社会主義者を生む原因になつたのである。

このことは「社会の不合理」に反抗して社会主義者になつた者の数も順位としては上位にあることとも関係している。「土地が次第に併呑されて小作人のダン〳〵増える事、医者の貧者に対して冷淡なる事、及金貸の法律を楯にとりて貧者をイジメる事等を、日夕目撃して感慨に堪えず、遂に彼等を救済するの方法を研究して社会主義者となりたり」[2] というのがその一例である。小作人は増加しても自分は小作人ではないし、医者に冷淡にされるのも自分ではなく、金貸に苛められるのも自分ではない。彼は社会の不合理の外に在るが、最早それ以上不合理を見過すことができないとして社会主義者になつたのである。それは、自分は現存社会の中で犠牲を強いられている者ではないが、貧者や弱者への強い同情から社会主義者になつたという者と共通している。

貧困と戦争の犠牲者という経済的・物理的圧迫からの解放から社会主義者になつた者もたしかにいた。しかし自らはそれらの圧迫を受けておらなくとも、人道主義といういわば「観念」が人間行動を決定し、転換させていく大きな要素でもあることを、以上の分析において知ることができるであろう。明治初期の社会主義運動は戦争と国民生活の圧迫の中から生まれ

たものでもあるが、明治維新以後の自由と民主主義を求める近代思想の発展の一つの結実でもあつた。つまり近代思想の根本精神である人道主義精神が、ようやく小さなものであるが結実したものであつた。

(1) Sen Katayama; The Labour Movement in Japan. (Chicago, 1918) pp. 60—63.

(2) 週刊平民新聞　第四十五号　明治三十七年九月十八日　石渡五六の文。